

下北山村

～自伐型林業と観光振興を軸に関係人口を創出～

奈良県の東南端に位置する下北山村は、奈良盆地からは自動車で2時間前後を要する大自然に包まれた山村です。人口減少が進む村では、働く場の確保や移住・定住の促進を図るために、関係人口の創出に力を入れています。地域おこし協力隊での活動を経て定住した人や、都市部で生活しながら村を応援する様々な人々がつながることで、さらなるつながりや新たな動きへとその輪は少しずつ広がっています。

I 概要

1. 地理・歴史

奈良県の東南端に位置する下北山村は、和歌山県北山村、三重県熊野市に隣接する面積133.39km²の山村である。奈良盆地からは自動車で2時間前後を要するが、太平洋に面した三重県熊野市へは40分ほどでアクセスできる。そのため、村の生活圏域は熊野市や新宮市となっている。

2015年の国勢調査では人口は895人、世帯数は517世帯となっているが、2019年5月現在の推計人口では786人とさらに人口減少が進んでいる。

一帯は「近畿の屋根」とも言われる多雨地帯で、西部には釈迦ヶ岳をはじめとする大峯山系が連なり、村の約半分が吉野熊野国立公園に指定されている。2004年には、7世紀後半に役行者が開いたと伝わる修験道「大峯奥駈道」を含めた「紀伊山地の霊場と参詣道」

が世界遺産として登録されているほか、「日本の滝百選」にも選ばれた総落差160mの「前鬼不動七重の滝」、「明神池の七不思議」として様々な言い伝えが残る「明神池」や「池神社」など、大自然と神秘に包まれている。

下北山村の位置図



また、近畿圏有数の貯水量を誇る池原ダム湖には、体長60cmを超える巨大なブラックバスが棲息し、バスフィッシングのメッカとして全国的にも知られている。

面積の9割以上を森林が占める同村での生活は、自然と向き合いその恵みを受けて営まれてきた。そのような村を住民は親しみを込めて「きなりの郷」と呼ぶ。「生なり」とは「まざりけのない純粋な」という意味で、自然に包まれた、ありのままの村の暮らしぶりを表現している。

2. 産業構造

村の従業地による就業者人口（15歳以上）の産業別割合を見ると、第1次産業が9.0%、第2次産業が25.8%、第3次産業が65.2%と、奈良県平均（順に3.4%、22.2%、74.4%）に比べ第1次産業の割合が高い（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2015年））。また、第1次産業の中でも林業経営体は16経営体（県内17位）となっている（農林水産省「農林業センサス」（2015年））。

民営事業所数は80か所（県内36位）、従業者数は442人（同35位）で、従業者特化係数^{※1}の高い産業（産業中分類別）は、「林業」（116.5）、「宿泊業」（11.4）、「技術サービス業」（9.4）の順と、林業従事者の割合が相対的に高い（総務省「経済センサス活動調査」（2016年））。

※1：ある産業の地域内における従業者比率を、全国における従業者比率で割って求められる数値。1より大きいほど、その産業に特化していると捉えられる。

3. 人口構造

下北山村「人口ビジョン」によると、1965年に3,188人であった同村人口は1985年には半数程度まで減少、その後も緩やかに減少が続いており、転出による減少率や出生率が現状の水準で推移した場合、総人口は2020年には734人、40年後の2060年には133人まで減少すると推計されている。

このように人口減少が続く下北山村では、地域に雇用場を確保し、移住・定住を促進することで、人口減少の抑制に取り組んでいる。

II 村の活性化に向けた様々な取り組み

かつては林業が村の主要産業であったが、今やその担い手も高齢化により減少している。村では働く場を確保するための産業振興施策として、自伐型林業の定着、観光の振興、サテライトオフィスやテレワークによる働く場の創出に取り組んでいる。

また、「移住・定住の促進」は容易に進捗するものではないことから、都市部などに住みながら村に関わりを持ち応援してくれる「関係人口」の創出にも力を入れている。

1. 林業振興の取り組み

○自伐型林業の定着に向けた取り組み

村では2016年度から、地域おこし協力隊の制度を活用して自伐型林業の推進に取り組んでいる。自伐型林業とは、多くの人員と大型機械を導入して大量伐採する従来の林業とは異なり、山林所有者や地域が自ら森林を管理し、持続的に収入を得つつ環境の保持を図る林業形態である。小規模ゆえ



作業道の整備（上）



きなりの森づくり研修（右）

に多額の収入を得ることは困難だが、初期投資や事業経費が少ないことから参入障壁も低く、ゲストハウスの運営など他の職業との兼業により生計を立てることが可能である。村では自伐型林業を地域に定着させようと、役場の職員や地域おこし協力隊が中心となって取り組んでいる。

また、自伐型林業に関心のある林業未経験者・初心者を対象とした「きなりの森づくり研修」を毎年開催し、担い手の育成にも取り組んでいる。4年目となる2019年度は、10月から今年（2020年）1月まで全5回10日間の日程で行われ、チェーンソーの取扱い、選木・伐倒・造材、バックホー（小型の油圧ショベル）を使った作業道の開設等を実践的に学べる内容となっている。

○林産加工施設の復活

2018年5月には村の林産物の加工・利用の促進と働く場の確保を図るため、約10年間休止していた製材所を林産加工施設として復活させた。現在、村内で建設が進む保育所・小学校・中学校合同校舎の内装材の加工が行われている。施設運営は地元の木製家具等の製作会社が受託。社長は流木に魅せられて独学で木工技術を身につけたという村外からの移住者で、地域イベントへの参加や地元中学生の体験学習の受入にも前向きである。

村や林業に高い関心を持つ住民のユニークな発想を取り入れつつ、地元の森林資源を地域で製品化し近隣で活用する。林産加工施設は、そのような「林業の6次産業化の拠点」を目指している。



林産加工施設で原木の丸太を加工する様子（上）



レーザー加工機によりデザインが施された小物類（左）

2. 観光振興の取組み

○下北山スポーツ公園

1982年、ダムの建設に伴い廃河川敷となった地域に「下北山スポーツ公園」が整備された。総面積19万m²の広大な敷地には、多目的グラウンドや人口芝グラウンド、10面のテニスコート、パターゴルフ場のほか、コテージやオートロッジを備えたキャンプ場もあり、夏にはスポーツ合宿等で予約が埋まるほどの人気。国内最大級のキャンプ場予約サイトの予約件数部門では2017年、2018年と2年連続西日本1位に輝くなど、村の観光拠点となっている。



下北山スポーツ公園 (上)

キャンプ場から見上げるダムの堰堤は圧巻 (右)



公園内には物販施設「きなり館」があり、館内レストランでは特産品「下北春まな」の漬物で作られた「めはり寿司」や、「下北春まな」を粉末にして使用したソフトクリーム「まなソフト」などを味わうことができる。また、南朝の遺臣が村に伝えたと言われる「南朝みそ」、標高が高く朝晩の寒暖差が大きい気候を活かして作られる「下北



きなり館

山村茶」なども購入でき、村が進める「きなりの郷ブランド・特産品」の研究・開発、6次産業化の拠点となっている。

1996年には「きなり館」の隣に下北山温泉「きなりの湯」がオープン、ナトリウム炭酸水素塩泉の泉質は美肌の湯として女性客に好評である。

また、スポーツ公園から少し離れた池峰地区には、全国的にも珍しい村営の「池の平ゴルフ場」もあり、低料金で気軽にゴルフを楽しむことができる。



めはり寿司がついた真菜うどん定食 (左上)

きなりの湯 (右下)



村は、2018年4月、「奈良県と下北山村とのまちづくりに関する包括協定」を締結。「高めあい、助けあう『きなりの郷(まち)』づくり～住みたい、住んで良かった、行きたい、行って良かった“きなりの郷下北山”～」をコンセプトに、「村外来訪者の誘致」「地域活力の創出・人材育成と雇用の強化」「災害対策機能の整備」を軸とした、下北山スポーツ公園周辺地域のまちづくりを奈良県と協力して進めている。

3. 関係人口創出の取組み

○奈良・下北山むらコトアカデミー

「奈良・下北山むらコトアカデミー」は、同村の地域づくりや村とのつながりづくりに関心のある首都圏在住者を対象に、村の現状を学ぶ基礎レクチャー、グループワーク等を通じて地域の可能性や活性化につながるプランをまとめてもらう実践型プログラムである。毎年全5回の講座を実施、うち1回は2泊3日の現地実習が行われ、受講生は現地での住民の暮らしや仕事、様々な地域資源に直接触れ、体験することができる。

2016 年以降、累計 35 名が参加。同アカデミーの開催をきっかけに、村と関わる人々の輪が少しずつ広がり始めており、4 期目となる 2019 年度の同アカデミーには、第 2 期の受講生がメンター（受講生のプラン作成を支援する伴走者）として参加している。

また、第 1 期受講生が勤務する、うつ病の再発防止訓練や社会復帰を支援する会社が同村と協定を結び、村内に事業所を立ち上げて、2020 年度より職業体験プログラムなどの事業を開始する予定。その他、第 3 期受講生の大学生が、仲間とともに村の空き家を DIY で改修し、関西圏、関東圏から様々な学生が集まって活動する拠点を整備中。関係人口の輪を広げようとするこの取組みは、総務省の関係人口創出拡大事業に採択されている。



奈良・下北山むらコトアカデミー

〇コワーキングスペース「SHIMOKITAYAMA BIYORI」

2017 年、企業のサテライトオフィスやコワーキングスペースとして「SHIMOKITAYAMA BIYORI」がオープンした。かつて山村留学の寮だった建物は、デザイナーの意見を取り入れ斬新



コワーキングスペース
「SHIMOKITAYAMA
BIYORI」



な空間に生まれ変わり、Wi-Fi を完備した静かで快適なオフィス環境となっている。現在、むらコトアカデミー第 2 期受講生のデザイナーが村に移住し、事務所を構えている。住民が気軽に立ち寄れるカフェにもなっており、地域内外の人々が交流する場として、様々な会議やイベントも開催され、村の活性化につながる様々な出会いや動きが生まれる拠点となっている。

4. 地域を支える人々

〇NPO 法人サポートきなり

高齢化が進む下北山村では独り暮らしの高齢者が多く、買物や通院のための移動、草刈り、ハチの巣の駆除など生活上の困りごとも多い。NPO 法人サポートきなりは、そのような住民の困りごとの解決、生活の支援を行っている。

「ふるさと復興協力隊」「地域おこし協力隊」の隊員やその OB・OG が中心となって活動しており、地域の高齢者の足として有償旅客運送を行うほか、下北春まなの有機栽培や給食センターへの出荷、毎週土曜日にスポーツ公園で開催される「土曜朝市」の運営、2017 年にオープンした「ぼこぼん図書館」の運営など、住民の生活支援に留まらず観光振興や子どもの健全育成等、地域の活性化に結びつく様々な取組みを行っている。



下北山村では移住にぎわいを見せる土曜朝市の様子
住者や地域おこし協力隊、村に関わる地域外の人々、役場の若手職員等により、自伐型林業の定着や観光振興など、地域活性化に向けた様々な活動が少しずつ実を結びつつある。都市部から隔絶された大自然に包まれた環境だからこそ、そこに魅力や生きがいを感じる人々が集まってくるのかもしれない。「下北山に住んで良かった」と思える村づくりを目指し、交流人口創出の取組みはこれからも続く。
(前田 徹、太田宜志)